

法王の舌禍事件

今年の九月、ローマ法王ベネディクト一六世による舌禍事件の反響が世界を駆けめぐった。

法王が母国ドイツを訪問中、レーゲンスブルク大学で神学を講義したときだった。一四世紀の東ローマ皇帝マヌエル二世のことは引用しておこなった発言で、火がついた。「ムハンマドがあらたにもたらしたものは、剣によって自らの説くところを広めよと命ずる邪悪と残酷だけ」と言ったのだからたまらない。世界のイスラム諸国から強い抗議の声があがった。あとになってからいくらか弁明しても、ときすでに遅し、後の祭りだった。

この法王発言はもしかすると、今後さらに「反米欧」「反キリスト教」の動きに拍車をかけることになるのではないだろうか。いかなる弁明、釈明をおこなったとしても、法王という立場を考えた場合、それが不用意な発言であったことは否定することができない。

じつはわたしは、たまたま昨年の一月中旬、パリに行く機会があった。ユネスコ本部でおこなわれたバチカン主催の「対話シンポジウム」に出席するためである。知られているように昨年四月、バチカンでは法王が替わった。ポーランド出身のヨハネ・パウロ二世が亡くなり、そのあとをドイツ出身のラッツィンガー

山折哲雄

枢機卿が継ぎ、さきのベネディクト一六世が誕生したからだ。

思い返すと、一九六〇年代、バチカンは第二公会議を開いて宗教間対話を推進する大きな動きを見せた。そのときの法王がパウロ六世で、このとき発布された法王の回勅が今回の会議に先立って参加者のもとに送られていた。そのためである。シンポジウムのテーマも「対話の可能性―パウロ六世と文化の多様性」となっていた。そのうえ、この「文化の多様性」は、ユネスコがこれからとり組もうとする重要な政策課題でもあったのである。

このシンポジウムへの参加者は哲学、神学、歴史学の各分野の専門家、それにバチカンから派遣されたユネスコ大使と枢機卿が加わり、わたしを含め総勢八名で構成されていた。ところが不思議なことに、そこにはイスラム側からの参加者がいなかった。あるいは主催者の側に、これまでのキリスト教対イスラムという枠組みをこえようとする意図があったのかもしれない。

今度のこととそれが関連があるのかどうか、法王による舌禍事件がこれからのような推移をたどるのか、しばらくは見守らなければなるまいと思っている。

やまおり てつお / 1931年生まれ。岩手県出身。東北大学文学部卒業。東北大学文学部助教授、国際日本文化研究センター教授、所長を経て、同センター名誉教授。専門は宗教学。主著に『近代日本人の宗教意識』『死の民俗学』『愛欲の精神史』『歌の精神史』『テクノボーになりたー私の宮沢賢治』『ブツダは、なぜ子を捨てたか』などがある。



目次

DECEMBER 2006 月刊みんぱく 12

01 エッセイ 世界へ世界から
法王の舌禍事件
山折 哲雄

02 特集 30巻記念

『月刊みんぱく』発行30巻記念座談会
『月刊みんぱく』の過去・現在、
そして未来
石毛 直道
野村 雅一
池谷 和信

09 『月刊みんぱく』歴代編集長
からのメッセージ

小山 修三
八杉 佳穂
杉田 繁治
中牧 弘允
秋道 智彌
小長谷 有紀
栗本 英世
長野 泰彦
印東 道子
小川 了

14 みんぱくインフォメーション

万国津々浦々
スーツケースとアマゾンの旅
齋藤 晃

17 表紙モノ語り
350枚の表紙
池谷 和信

18 外国人として生きる
心で奏でるビーナス
―ウエイウエイ・ウー(巫 謝慧)―
陳 天璽

20 生きもの博物誌
亜熱帯林と草果
藤原 徹

22 フィールドで考える
掘り出された
ニカラグア内戦の傷
長谷川 悦夫

24 企画展 世界のおくりもの
こどもとおとなをつなぐもの
次号予告・編集後記

巻末 『月刊みんぱく』30巻総索引